

馬祖列島



馬祖列島は、海峡の北部海域に浮かぶ東引島、北竿島、南竿島、西莒島、東莒島の主要5島からなる。台湾本島と列島を結ぶフェリー「臺馬輪」は夜明けとともに最初の寄港地、東引島の中柱港に到着した。昨晚、基隆の港を出帆したこの老朽船は台湾海峡の風浪にもあそばれながら、約170キロの航程を8時間かけてこの島にたどりついたのだ。栈橋に降り立っても足下がふらふらするのは、悪天候による船の揺れから身体感覚が抜け出せないせいだろう。旅行カバンを引いて、海岸からせり上がった丘の斜面に広がる集落にむかう。

中村達雄「文・写真」



馬祖列島は中国福建省の沖合25～60キロの海域にある。有人の主要5島、15以上の無人島、岩礁から構成される。総人口は約6500人で、そのうちの約4000人が南竿島に居住している。

者たちが取り付いている。旅館を決めて宿泊手続きをする。部屋は高級ホテルのように清潔で、コンピュータまで備え付けてある。

スクーターを借りて散策の準備を整える。目指すのは島の東端、世尾山の断崖が台湾海峡に落ちる急斜面の東湧燈台だ。清の光緒30（1904）年、英国人技術者によって設計建造された白亜の塔は、今でも華南から上海や天津にむけて台湾海峡を航行する船舶の道標になっている。礎石には「閩海関 東湧燈台」と朱で彫られているので、現実とはかく名目上は福建（閩）税関に所属するらしい。すでに60年前に中国大陆と切り離されながら、中国であることを主張し続けざるを得なかった「反攻大陸」政策時代の名残りであろう。

左上：中柱港からせり上がる山の斜面に中柳村と楽華村が広がる

左下：東湧燈台—紺碧の台湾海峡に白亜の塔が映える。前世紀初頭から100年以上も台湾海峡を照らし続けている



東湧燈台

つづら折りの坂道をのぼっていくと、斜面の民家の屋根に小さな鳩小屋が立ち、数羽が海にむかつて羽ばたこうとしている。馬祖列島は野鳥の保護区としても知られ、とくに東引島では群棲する渡り鳥の姿を見ることが多い。

坂道は10分ほど島のメインストリートに達した。向かって左側の家並みが中柳村、右側が楽華村だ。食堂やゲームセンターなどの娯楽施設は道路の左に集中し、民宿やホテルは右に集まっていて面白い。ネットカフェをのぞいてみると、大きなフロアに40台ほどの端末が並び、それぞれに兵役の若

燈台を見下ろす世尾山の斜面にのぼる。濃い群青色の海峡には茫洋とした水平線以外に視界に入るものはない。ぼんやりと霞む海原を見て、いま絶海の孤島にいるのだとい





中柱堤防が東引島（手前）と西引島を結んでいる



蔣経国像

う感慨に襲われる。

中柱堤防

東湧燈台から北部海岸沿いに西引島へ向かう道を守る。切り立った海岸線の雄景（12頁写真）は自然が演出する一幅の絵画とでも表現すべきだろう。おもわず、台湾海峡に浮かぶ真珠という言葉が脳裏を去来する。その美しさにスクーターを止めてうっとりする。海に没する断崖のところどころに野鳥が群れてにぎやかだ。渡り鳥であろう。その下の方で釣り人が長い竿を振っている。原始の風情が残る島の海は魚影が濃く、磯釣りのメツカらしい。東引島の地図には釣りのポイントが無数に印されている。

西引島は東引島の北西約1キロの海上に浮かぶ小島だが、20年前に両島をつなぐ中柱堤防が竣工して往来が便利になった。堤防の中央には中国式の亭があり、そこに蔣経国像が鎮座している。38年間の長きにわたって国民に緊張を強いた戒厳令を解除し、中国大陸への里帰りなどを解禁して台湾社会の部分的な民主化を許容した蔣経国は国防相時代、頻繁に東引島を訪

れ、最前線で「反攻大陸」の軍事指揮をとった。この島は台湾防衛の要だったのだ。

西引島には軍事施設が多く、民家はほとんどない。島を一周し、最後に兵営の歩哨に敬礼してふたたび中柱堤防を渡る。中柳村へもどる山越えの道で、尾根に立ってながめた村の集落が黄昏の斜光に輝いている。ふりかえると、夕焼け空の下に堤防で結ばれた西引島の美しいシルエットが旅情をそそる。村にもどり、ネットカフェに併設された食堂で排骨飯と臭豆腐の夕食をとる。一日の任務が終わったのだろうか、兵役の若者たちはコンピュータと対面し、あるいは携帯電話を耳にあて、なにやら楽しそうに島の夕暮れ時をすごしている。

南竿島——馬祖列島の中核

ふたたび「台馬輪」の客となる。早朝6時半に中柱港を出帆したフェリーは、馬祖列島の中心をなす南竿島に向かっている。見晴らしの良いラウンジで軽食をとりながら早朝の航海を楽しむ。船は8時半に南竿島の福澳港に接岸

港から至近の旅館に宿をとった。南竿島は国際港を持つ福澳村を表玄関にして、珠螺、四維、馬祖、津沙、仁愛、清水、介壽、牛角など9村からなる。どちらかといえば山あいに位置する珠螺、四維、馬祖、清水の4村は比較的新しく、辺境防衛軍の兵営などが建物のほとんどを占め、それに娯楽施設としての飲食街が付随している。残りの村は数百年の島の歴史を背負った海辺の古鎮で、風俗習慣は福建（閩）の海洋文化の古式を継承しているようだ。島の西南角の入り江に面した津沙村には、夏場だけ民宿として使われる古建築群が斜面の高見に点在する。まだ入り江に防波堤などなかった時代、台湾海峡の大波を避け、雨期の湿気からのがれるため高所に建設されたものだろう。それら静かな古民家の傍らから入り江の砂浜に面した現在の集落をながめる。石を載せて補強したレンガ色の屋根は、建物を海峡の強風から守るための工夫に違いない。

馬祖と媽祖廟

スクーターがつのめりそうな急坂を下っていくと、前方に華麗な媽祖廟

した。埠頭の隣りに近代的な漁業棧橋がつづき、小船がさざ波に上下している。島民は漁業を生業としているのだろう。福澳港の「澳」の字は、海が陸地に深く入り込んだ地形を表しているのだという。実際の港も海岸線をスプーンで抉ったような天然の良港である。台湾から大陸に渡る人々も、大陸からやって来た観光客もここで出入国手続きをして船を乗り換え、それぞれの目的地に向かう。おなじ海峡横断でも南の金門島のような派手さはなく、静かな出船、入り船の風景だ。



福澳港フェリー埠頭はもともと軍専用の棧橋だった

の屋根が見えてきた。仁愛村だ。馬祖列島の名称が媽祖廟の祭神である「媽祖娘娘」に由来しているのは言うまでもない。華南の海岸線と台湾を中心に点在する媽祖廟は「娘媽廟」「阿媽廟」「亜媽宮」、そして「天后宮」などとその名前はさまざまだが、この島の漁師が「馬祖廟」と命名したのが「媽祖」という名称の始まりらしい。「媽」の字から「女」偏が落ちたのは漢字を知らなかった漁師の愛嬌であろう。媽祖は女神なので、本来「媽」の字が正し

津沙村の漁師は今でも手漕ぎの小船で海に出る



い。こんな経緯から列島の名前も「馬祖」になった。

石造りの集落を歩きまわって写真を撮り、海浜の「鉄堡」とよばれる軍事要塞を見学した。かつては海に突き出た小さな半島に大砲や機関銃が天を突き、塹壕が掘られ、敵の上陸兵を阻む無数のガラス片が鋭い切断面を剥き出しにして埋め込まれていたという。今はすべて撤去され、「鉄堡」は村の少ない観光資源になっっている。

村から数キロ離れた海岸に地下埠頭があるというので見に行く。名前を「北海坑道」という。海岸の絶壁に深く穿たれた潜水艦基地のような風情で、数十トン級の小型船舶なら何隻も停泊できそうだ。戦時の物資補給を目的に施工され、幅10、高さ18、奥行き640メートルの地下水路は馬祖列島における軍事工事の代表とされる。

北海坑道から島の反対側にある牛角村に行く途中、介壽村で小休止する。ここは連江県政府の所在地だ。つまり、馬祖列島の中心ということになる。この村には立派な飛行場があり、台北や台中との間をプロペラ機の定期便が頻繁に往復している。メインストリートに登りきったところが牛角嶺と牛背



右：鉄堡は台湾海峡に突き出た海の大要塞だった
下：北海坑道——入り江の洞窟を掘り抜いて建設した地下埠頭。現在は観光地として一般開放されている

馬祖列島は国民政府が台湾に移って以来40年以上も軍の管理下に置かれ、台湾本土との間で民間人の往来は制限された。現在も軍の駐屯は続き、金門島、澎湖諸島とともに防衛の拠点として主に兵役の若者を受け入れる前線基地になっている。1992年に観光地として一般開放されて再開発が始まり、2001年には台湾海峡の渡航緩和政策(小三通)で中国大陆との往復ができるようになり、2008年には外国人もここを経由して中国との往来が可能になった。

嶺の二大山を結ぶ尾根で、そこから坂道を下れば牛角湾の漁村になり、村の高台には真っ赤な媽祖廟が優美な姿を誇っている。高台をさらに登っていくと台湾海峡の視界が一気に開け、右手には明日訪れる北竿島の島影を望むことができる。

北竿島へ

南竿島の北の海域に浮かぶこの島は、くびれた蓮根のような形をしている。福澳港から快速船に乗れば15分ほ

どで上陸地の白沙港だ。塘岐村、橋仔村、芹壁村、白沙村、そして浅瀬で繋がる小島の后沃村などの集落からなるこの島には、列島でもっとも高い壁山(298メートル)がある。晴れた日ならそこから馬祖の島々や中国大陆を見渡すことができるという。今日は山に雲がかかっているので登るのをあきらめ、港でスクーターを借りて北竿島最大の集落である塘岐村をめざす。

砂州の浅瀬に敷かれた海道を渡って、すぐ隣の小島にある后沃村に移動する。砂浜には小舟が引き上げられ、その後方に離陸するプロペラ機が見える。后沃村の「后沃」は「後澳」とも表記

后沃村の龍嫌い

され、北竿島で最も奥の入り江にある村、という意味だ。ほんの十数戸が寄り集まった小村である。石積み民家が並ぶ路地を進むと、楊公八使廟に行き当たった。楊公八使とはこの島に伝わる古代からの祈祷師で、悪龍に虐められたことで有名らしい。そのため、この廟は龍を想像させるレリーフや装飾物を一切排除している。90年代、北竿文化協会は海岸でドラゴンボートレースを企画したが、后沃村がこれに強く反対して実現しなかった。龍嫌いの村なのだ。



上：后沃村の民家は島で切り出された石を建築資材に使っている
中：小さな村で最も大きな建築物の楊公八使廟。龍のレリーフを徹底的に廃した廟は中華圏では珍しい
下：橋仔村の媽祖廟の屋根には大きな龍が踊っている。龍嫌いの楊公八使廟との対比が面白い



橋仔村は島の反対側だ。スクーターで山の尾根まで登り斜面を一気に下っていくと、前方に小さな漁港と派手な寺廟が見えてきた。なんと、この村の媽祖廟の屋根には見事な龍が踊っているではないか。悪龍はこの漁村までやって来なかったらしい。廟の敷地内にある漁具展示館に入ってみたが、何ら見るべきものはない。斜面に広がる集落を歩くと小道に幾つもの小さな橋が架かっていることに気づく。湿った季節風が吹くと、雲が山の斜面にぶつかって大雨が降り濁流となつて村を流れ海峡に注ぐのだという。小さな橋はそれらの濁流を跨ぐための生活の知恵



芹壁村の古民家群

だったのだ。橋仔村という命名に納得する。小一時間ほど散策し、北竿島の最後の訪問地、芹壁村へ急ぐ。

漁業から芸術へ

大陸に面した海岸に砂浜がつづく。その上の斜面に福建様式の建築群が広がっている。これだけ大規模な古民家群は東引島にも南竿島にもなかった。ここ芹壁村はかつて馬祖列島でも有数の漁業基地だった。70年代以降、漁撈自体が近海から遠洋に移ったために村は衰退し、漁民のほとんどがここを捨ててしまった。古民家の廃墟だけが残ったのだが、最近になって都市にはない生活環境を求める詩人や画家が住み着き、新しい島の文化を育みはじめている。彼らは生活の糧を得るために、夏期、美しい砂浜を求めて訪れる観光客に住居や食事を提供する民宿やカフェをオープンした。

人気のない珈琲店のテラスから芹壁村をながめる。家々の軒先には、決まって反共スローガンを刻した石板が貼付けられている。「爭取最後勝利」などの標語を見ていると、ここもまた「反攻大陸」政策の前線基地であったこと

がわかる。

福建を護る二匹の番犬

馬祖散策の最終日、南竿島の福澳港から快速艇に乗って西莒島に渡る。船はまず東莒島の猛猛港に寄港し、数キロ離れた西莒島の青帆港にむかう。約1時間の航程だ。2島は東西をあわせて莒光郷と称される。「莒光」とは「毋忘在莒」（莒に在るを忘る母かれ）という春秋戦国時代の武將が残した言葉に由来する。燕の国に破れた斉の田単が莒の国に逃れて兵を再建し、5年で燕を破って斉を再興した故事である。蔣介石は台湾に追いやられた我が身を田単になぞらえ、大陸に至近のこれら2島に「西莒」、「東莒」という新たな名前を与えて「反攻大陸」の象徴としたのだ。

青帆村は小雨模様で人影が少ない。観海楼という名前ばかりが立派な簡易食堂で昼食をとり、船着き場にもどる。兵役の若者が数人、定期船の待合室で事務をとっていた。軍服に身を包んだ若い女性がいたので「やはり兵役ですか」とたずねると、「志願です」と答える。西莒島の旧名は西犬島、東莒島

は東犬島だ。中国大陸からすれば、二匹の犬で福建省の表玄関を守っているという気分なのだろう。

青帆港から南竿島への復路はにわか天候がくずれ、小さな快速艇は大波に弄ばれながら航海した。船窓に打ち寄せる巨浪が砕けて小さな泡になり、海峡の風景をさえぎる。銀色に輝く泡粒は、台湾海峡に浮かぶ馬祖という五つの真珠が放った無数の子真珠のようだ。船の丸窓に、往路では確認できた福建の陸影を見ることはできなかった。■



西莒島の青帆港と集落